令和 ４ 年度　さいたま市立与野南中学校　学校だより

南風（みなみかぜ）

第 ８ 号

令 和 ４ 年 ９ 月 ３０ 日発行

http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp

＜学校教育目標＞ 進んで学ぶ生徒　心豊かな生徒　心身共に健康な生徒

話のネタ増やし～人間関係の専門家として

校長　　吉　原　誠　士

「“話材”の豊富さ」はコミュニケーションを支える大切な要素です。本題に関わって、あるいは脇道にそれながらも相手から何かしらトピックスを引き出せると、その後で程よい距離感をもって会話が進んで、信頼関係も堅くなっていく場合があります。話の材料を増やすには、興味の対象範囲を広げ、人間という存在に関心を持つことが肝心になります。私が中学生時代から精神科の医師やカウンセラーといった人間に関わる仕事を希望していたり、担任をしながらクラスの４０人から振られた話題すべてに応じられるようになることを目指したりといった企ては、今の仕事を続ける上で都合がよかったと言えるでしょう。

もっとも、以上のように書くと聞こえはいいようですが、「手間」「暇」「金」をかけることを奨励しながら自分も“モノ”を増やし続けることになったのも確かです。溢(あふ)れる書籍その他の“ガラクタ”に囲まれる私を心配する向きもあり、中には私の持ち物を“予約”しようとする者までいます。世の中は断捨離の方向に進むことが流行のようですし、親類や友人たちが身辺を片付けだしたのを見ながら少し焦ってもよさそうなものですが懲(こ)りません。校長室は、そんな私をそのまま語るような空間になっています。校長昇任記念にいただいた胡蝶蘭(こちょうらん)も並び、他校の友人たちの多くは「枯らしてしまった」とぼやいているのに本校では毎年元気一杯に花を咲かせ、応援してくれているようで嬉しくなります。

特に中学校の教員は教科や大学時代の専攻（“気象学”や“万葉集”など）を“専門”として自覚し、恐らくプライドも持っています。私は最近、敢えて「教員はそれ以前に何についての専門家であるべきか」と切り返すことにしています。学校に勤めていれば、生徒以外にも、保護者の皆さんや地域の方々、さらには学校の保守整備にあたる市の職員や学校出入りの業者さんに至るまで、多くの“他者”と関わります。“適切な距離感”、“話のテンポ”、“ノンバーバル（言語以外）による伝え方”、さらに“他人を傷つけない軽妙な冗談”まで含めたコミュニケーションスキル以外に、日頃から“話のネタ”という持ち物を増やすことに留意して“勉強”を進めているかどうかは、管理職として注視するポイントです。

他者との交流を“興味深く面白い（ interesting(インタレスティング) ）”ものにするために“持ちネタ”を多くすることは、「人間関係の専門家」たる教職員だけでなく、生徒達にも求めたいと思います。「自分に関わりないので聞かない」「無駄なおしゃべりは非効率的だ」など言って、自分から会話の窓口や対話の扉を閉じないでほしいのです。「あらゆることに興味津々」をモットーに様々な意見を頭にいれておくことは社会の分断を防ぎ、共生社会の実現にもつながります。本校の授業では幅広い方向に興味が湧くようにしながら、生徒が持つ情報量を増やせるようにします。直接体験はリアルな語りに直結しますし、話合い活動や様々な発表場面を設けることも知識や理解を活かす訓練として位置づけることが可能です。もちろん教職員も自己研鑽(じこけんさん)に励んでまいります。今後ともよろしくお願いします。